

紹介

高橋秀樹編

『生活と文化の歴史学 4

婚姻と教育

日本古代・中世の歴史・文学研究者が、社会的なテーマのもと多数の論考を寄せる論集として、注目されている本シリーズ。その第四巻のテーマは、「婚姻と教育」である。この二テーマには若干の隔たりがあるようにも思えるが、I「婚姻の諸相」五論文にII「親子・親族の諸相」六論文が加わって、実質的には家族・親族史研究が中核とされており、そこに教育史の諸論考(III「教育の諸相」六論文)が付加されるかたちで、一書にまとめられている。

I・IIの家族・親族史のうち、古代・中世初期(院政期)に関しては、都市貴族化と婚姻の変化の関係性、入内・入宮儀礼における用途調達・奉仕者の実態、律令官人の孝行のあり方、摂関家外孫皇女の位置づけ、文学にみえる再婚観・親子観などに関する、個性的な個別研究がラインナップさ

れている。主に官人・貴族層を取り上げた諸研究が、文学研究との交流を経つつ、幅広くおこなわれている現状をみてとることができる。

一方、中世については、鎌倉時代と室町・戦国時代の婚姻形態に関する多数の事例を視野に入れた総合的論述、重要概念たる「惣領」についての再検討、村人の祖先祭祀を担う寺庵に関する考察など、多様な社会階層と時代の特質を意識しながら論じる、意欲的な論考が並んでいる。編者の高橋秀樹氏は、中世「家」研究の現状をまとめながら、研究者相互の議論がうまくかみあっていないことに危機感を示しているが、そうしたなかで、事実の集積・検討を基礎とし、かつ総合的な議論に資する論考が集められているようである。もちろん、個々の論点については、いまだ議論の余地も多いように感じられたが、今後の真摯なる議論の蓄積が期待されるところである。

家族・親族史に比して研究の蓄積が浅いIIIの教育史については、律令国家における教育の問題を総括的に論じた一篇、公達層の栄達に必要な素養としての舞の習得について論じた一篇のほかは、儒者の家(藤原

氏広業流)、権門寺院(東大寺尊勝院)、戦国大名(後北条氏)、足利学校など、個別勢力・組織内の「教育」の実態を解明する実証研究が並んでいる。そうしたなかで注目されるのは、これらの実証研究が、文学や聖教を含む典籍類の綿密な調査の進展を基礎として、おこなわれていることである。本書を読む以前は、「教育史」のイメージはとらえにくいものと感じていたが、本書によって、こういった手法が研究の新たな段階を切り開きつつあることを実感できた。

このように、背景にある研究状況によって位相は違うが、研究の最先端を示す魅力的な論考ばかりなのは間違いない。広く一読をお薦めしたい。

(A5判 四五六頁 二〇一四年九月)

竹林舎 税別二二〇〇円)

(山田 徹 京都大学助教)